

令和 8 年度研究推進計画

学校名 江田島市立中町小学校校長名 上本 真理

1 研究主題、研究内容・方法等について

- (1) 研究主題 「自ら学びを調整し、生き生きと表現する子どもの育成」
～各教科等におけるさとうみ学習の展開を通して～

(2) 主題設定の理由

昨年度は、AAR サイクルを用いた自己調整力の育成に重点を置き、授業改善を進めてきた。その結果、学びに向かう姿勢が育ち、自ら課題を決めたり疑問をもったりするなど、課題設定の力が高まりつつある。一方で、学習を自分事として捉えられず、依然として受け身の姿勢で授業に臨む児童も見られ、自己調整力の定着には課題が残っている。

また、表現力についても大きな課題がある。語彙力や読解力が十分でないために文意を正しく読み取れなかったり、意図を理解できなかったりする児童がいるほか、人前で話すことや言葉で表現することに苦手意識をもつ児童も少なくない。こうした状況から、児童が主体的に学び、自分の考えをもって表現するためには、自己調整力と表現力の双方を高めることが不可欠であるといえる。

そこで今年度は、「自ら学びを調整し、生き生きと表現する児童の育成」を主題に掲げ、学習を自分事として捉え、目的に応じて適切に表現する力の育成を目指す。昨年度に引き続き AAR サイクルを基盤とした自己調整力の育成を図るとともに、児童が「表現したくなる」題材を設定することが重要であると考え。そのため、さとうみ学習を中心に据え、豊かな体験を通して表現力を高める取組を進め、主題の実現を目指していく。

本研究における「自己調整力」とは、自らの学習の進め方を調整する力であり、1年生から6年生までの教育活動全体を通して育成していくものである。自己調整力は「学びに向かう力、人間性等」と深く関わり、低学年では児童同士の試行錯誤を大切に、中学年以降は学習における選択の幅を広げ、児童が自己評価を基に自分に合った学び方を選択できるよう支援していく。

また、「表現力」とは、自分の内面を言語化したり、相手や目的に応じて伝え方を工夫したりする力である。読書活動やさとうみ学習などを通して「感じ取る力」を育て、各教科や総合的な学習の時間などで「考えをまとめる力」を育成する。そして最終的には、目的や相手に応じて表現方法を選び、適切に表現できる力の育成を目指す。

具体的には、以下の5点を中心に取り組み、自ら学びを調整し、生き生きと表現する児童の育成を図る。

〈自己調整力〉

① 学習過程の設定

探究的な学習の流れである AAR サイクルを基に、学習過程を「見通し場面」「行動場面」「振り返り場面」の3つに整理し、各場面でのどのような自己調整力を発揮させるかを明確にする。また、児童と学習過程を共有することで、自ら学びを進める際の手がかりとする。

② 単元・題材構成と手立て

一単位時間の小さな探究サイクルが、単元や題材の流れの中で繰り返し循環するよう構成する。教師は、教示（モデル提示）から直接的支援（問いかけ等）、間接的支援（掲示物等）へと、児童の成長に応じて手立てを段階的に変化させる。

③ 実態把握および検証

授業づくりにおいて児童の実態把握は不可欠である。教師の観察や質問紙調査を通して実態を把握し、複数回の調査結果を比較することで、児童の変容や手立ての有効性を検証する。

〈表現力〉

④ 児童が「感じ、考えをもつ」場の設定

表現の出発点は、児童の内側に生まれる思いや気づきである。そのため、読書活動やさとうみ学習など、心が動く経験を意図的に設定し、表現の材料となる体験を豊かにする。こうした経験の積み重ねが、児童が自分の思いや考えをもとうとする姿につながり、自然と表現活動へと発展していく。

⑤ 相手や目的を意識して伝える場面の設定

表現力は、実際に伝える経験を重ねることで高まる。発表、話し合い、作品づくり、文章表現など、多様なアウトプットの場を計画的に設定する。また、「誰に」「何を」伝えるのかを明確にし、

目的に応じて伝え方を選ぶ力を育てる指導を行う。これにより、児童の表現がより豊かになり、相手に届く表現へとつながっていく。

(3) 研究仮説

「さとうみ学習」を核に、各教科の単元を構成し、自己調整力を育てる学習過程と、表現したくなる場・伝えたい場を整えることで、児童は学習を自分事として捉え、学びを調整し、生き生きと表現するようになるであろう。

(4) 研究内容

○表現力の向上

さとうみ学習を中心に捉え、各教科とも結び付けて表現の場を計画的に設けることで、児童一人一人の個別最適な学びを実現し、表現力の向上につなげる。

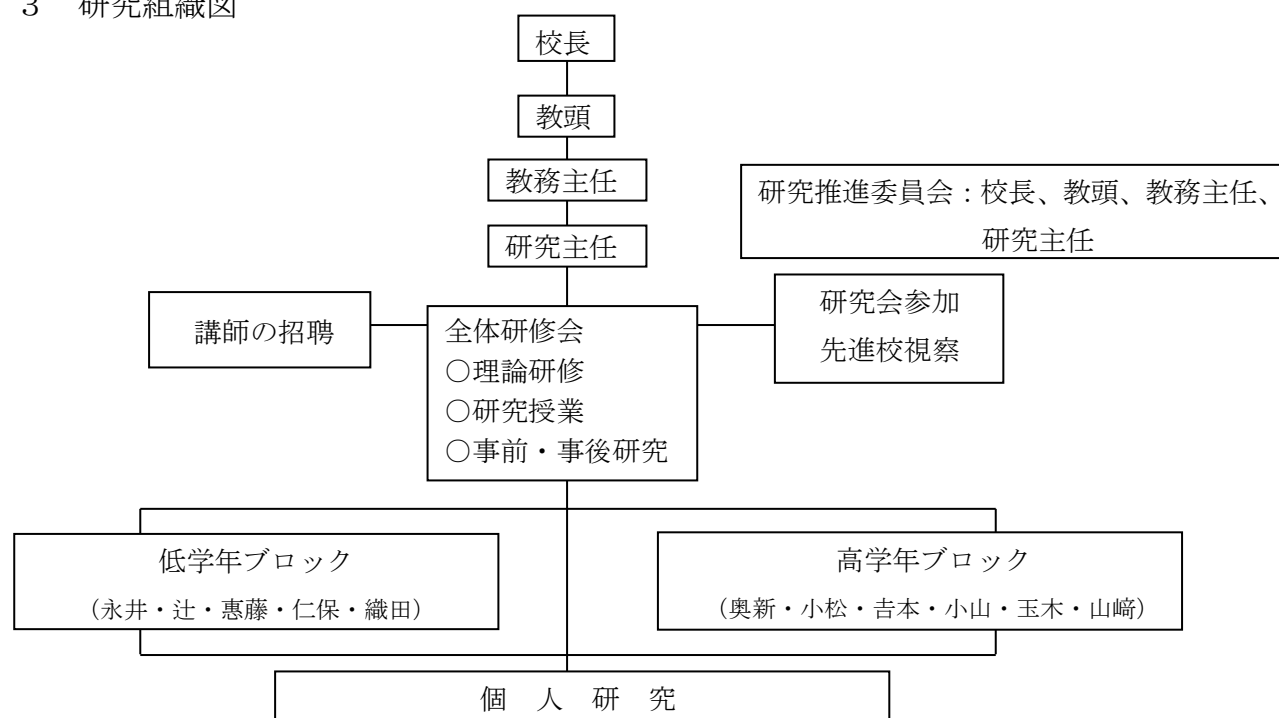
○自己調整力を高める授業改善

AAR サイクル（「見通しの場面」「行動場面」「振り返り場面」）による授業作りを行い、児童の自己調整力の高まりを目指す。

2 検証計画

研究内容	検証の視点	達成目標
<p>表現力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・MIM アセスメントと教師の見取りに基づき、児童の表現力の傾向を分析する。 ・さとうみ学習や各教科で、児童が「感じ、考えをもつ」経験を意図的に設定し、効果的か検証する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・MIM アセスメントの結果の推移 ・教師の観察記録（文意の理解、語彙の使用の変化） ・一人一人の表現力を3段階のルーブリックに整理し見取り、変容を分析する。 ・「伝えたい」「表現したい」という内発的動機の高まり 	<ul style="list-style-type: none"> ・学期ごと、ルーブリックを基に教師が見取り、最終的に質の高まりが見られる児童を80%以上にする。 ・さとうみ学習や読書活動などの経験を基に、自分の思いや考えをもととする姿が増える。（教師の見取り） ・表現活動に主体的に参加し、「伝えたい」という意欲が高まる。（児童質問紙）
<p>自己調整力を高める授業改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AAR サイクル（「見通しの場面」「行動場面」「振り返り場面」）による授業作り ・観察・質問紙調査を通して児童の実態を把握し、単元構成や手立てを改善する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元末と学期末テストの平均値（思考力・判断力・表現力）における同一集団の変容 ・見通しをもった計画表や振り返りシートの活用（質問紙調査） ・児童質問紙を基にした教師の見取り 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童質問紙における肯定的回答の割合を、年度末に4段階で3.2以上とする。（児童質問紙・教師の見取り） ・課題分析に基づいて設定した重点質問項目について、肯定的回答の割合を年度初めより20%以上向上させる。（児童質問紙）

3 研究組織図



・研究推進委員会・・・研究計画の立案と各種提案の検討を行う。

4 校内研修計画

月		研究内容	月		研究内容
4	3 (金)	今年度の研究について	9	10 (木)	研究授業③ (2年)
	18 (土)	校内研修 理論研修 ・自己調整力と5つの力 ・AARサイクルの授業づくり ・身に付けさせたい資質・能力 ・自己調整力についてのアンケート (4月末までに) ・目指す児童像の設定 ・研究授業の授業内容決定 理論研修 (さとうみ学習)		17 (木)	ブロック研 (低・高) 研究の進捗状況の確認 ワークシート等の製作物 や手立て等の準備
	23 (木)	全国学力・学習状況調査		10	8 (木)
5	14 (木)	模擬授業①②	10	31 (土)	みのり学習発表会
	21 (木)	ブロック研 (低・高) 理論研修 (自己調整力アンケート結果の分析)	11	12 (木)	研究授業⑤ (6年)
			12	3 (木)	研究授業⑥ (4年)
6	18 (木)	研究授業① (5年)		7日 (月) ~ 17日 (木)	江田島市標準学力調査
	25 (木)	研究授業② (ひまわり)		7 (木)	模擬授業⑦
7	6 (月) ~ 10 (金)	意識調査① (校内児童アンケート)	1	12 (火) ~ 22 (金)	意識調査② (校内児童アンケート)
	30 (木)	全体研修・模擬授業 (③、④)		28 (木)	研究授業⑦ (3年)
8	6 (木)	ブロック研 (低・高) 理論研修 (1学期の振り返り)		上旬	標準学力調査分析
	27 (木)	全体研修・模擬授業 (⑤、⑥)		18 (木)	ブロック研 (低・高) 今年度の振り返り
			3	4 (木)	研究のまとめ 次年度に向けて